

## 我らの助けは来る

丸山 勉

【聖書】 詩編 121 章 1～8 節

【都に上る歌。】

目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。  
わたしの助けは来る／天地を造られた主のもとから。  
どうか、主があなたを助けて／足がよろめかないようにし／まどろむことなく見守ってくださるように。  
見よ、イスラエルを見守る方は／まどろむことなく、眠ることもない。  
主はあなたを見守る方／あなたを覆う陰、あなたの右にいます方。  
昼、太陽はあなたを撃つことがなく／夜、月もあなたを撃つことがない。  
主がすべての災いを遠ざけて／あなたを見守り／あなたの魂を見守ってくださるように。  
あなたの出で立つのも帰るのも／主が見守ってくださるように。  
今も、そしてとこしえに。

【序】 人生という巡礼の歌

先ほどご一緒に歌いました新生讃美歌 435 番「山辺に向かいてわれ目を上ぐ」をお好きな方は多いと思います。また、その元になっている今日の聖書箇所でもある詩編 121 編を愛唱している方も多いのではないのでしょうか。私もとても好きな詩編の一つです。

この詩編は、とても印象的な「目を上げてわたしは山々を仰ぐ」という言葉から始まっていますね。ただ、もちろんこれは自然の大きさを讃えている歌ではありません。また、自然信仰のように、山そのものを神様にしているのでもありません。この詩人は巡礼をしているのです。パレスチナの荒地を自分の足で歩きながら、神殿があるエルサレムの丘を目指しています。「山々」というのが、そのエルサレムの丘のことなのか、そこに至る途上のゴツゴツとした岩山なのか分かりませんが、日本のような緑豊かな山というのではなさそうです。決して楽な道のを歩いているのではなく、思わず「わたしの助けはどこから来るのですか？」と言わざるを得ない、そんな歩みを進めている人の歌だ、と言えると思います。

私たちの人生、一生も、ある言い方をすれば、巡礼そのものではないのでしょうか。私たちの人生の目的は、まことの神様に会うということなのですから！ ですから、この「都に上る歌(=都もうでの歌)」というのは、私たちの人生と重ね合わせて味わうべき詩編なのだと思います。

## [1] 巡礼とその最中で得た「確信」

今ももちろんエルサレム巡礼とか、イタリアやスペインへの巡礼とか、いわゆるキリスト教信仰のゆかりの地を訪ねる旅をすることがありますけれども、この旧約聖書の時代の巡礼は、決してピクニックに行くような楽しい旅ではなかったはずです。飛行機と車、ホテルで二、三食付なんていうことではなく、自分の足でひたすら進み、厳しい自然条件の中、野宿をしながら、エルサレム神殿を目指していたのです。当時の人々、凄いと思いませんか？ 過酷な条件（もしかしたら再び帰って来れないかもしれないと思っていただでしょう。野生の獣もいますし、強盗に襲われる危険もあるのです）であることをよく知りながらも、神様を都エルサレムで礼拝したい、神様にお会いして、恵みを頂きたい！と切望しているのですから。私は、そのような思いを持って、毎週の礼拝に臨んでいるだろうか…。そんなことも問われるのです。

詩編の 120 編から 134 編までが、そのエルサレムへと向かう「都に上る歌」(「都もうでの歌」)としてまとめられています。この一連の詩編の結論とは何でしょうか？ それは、「都に上る歌」の最初の 120 編 1 節であると言われていています。——「**苦難の中から主を呼ぶと、主はわたしに答えてくださった。**」という確信、救いの体験です。

この信仰詩人は、神様に叫ばざるを得ないような苦難を経験し、主の名を呼んだのです。そして、その声を主は聞き、主はそれにお応え下さったというく個人的な救い>を、確信を持って歌っているのです。そしてそれは、今日の 121 編も同じです。——「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。わたしの助けは来る。天地を造られた主のもとから。」(121:1~2)

詩編 120 編の「苦難の中から主を呼ぶと、主はわたしに答えてくださった。」——これは、正に死んだ神ではなく、生ける神との出会いですね。そして、「わたしの助けは来る。天地を造られた主のもとから。」というのも、まだ現実の救いは得てはいないけれども、既に得た者のように、救いの先取りを喜んでいる、神様が生きて働かれることを信じるが故の確信が、ここで力強く言われているように思います。これは、ペトロの手紙一 1:8 に言われている、「あなたがたは、キリストを見たことはないのに愛し、今見なくとも信じており、言葉では言い尽くせない喜びにあふれています」と、本質的に同じことではないでしょうか。ペトロの手紙一ではそれに続けてこう言っています。——「それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです」(1:9)と。

## [2] 主は私たちが「見守る」方

さて、この詩編 121 編ですが、3 節以下を見てみたいと思います。3、4 節をお読みします。

どうか、主があなたを助けて／足がよろめかないようにし／まどろむことなく見守ってくださるように。見よ、イスラエルを見守る方は／まどろむことなく、眠ることもない。

この後の節でも出てきますが、121 編では何度も「見守る」という言葉が出てきます。神様は生けるお方として「目」をもって私たちから眼差しを外さず、常に守っていて下さるという信仰です。ここで語られていることは本当に慰め深いですね。巡礼に向かう足、**私たちの生活の具体的な一步一步**と言ってもよいと思いますけれども、その歩みがよろめかないで、きちんと前に進めるように確かなものにして下さる、と言います。何故なら、**神様はまどろむこともなく、眠ることもないからだ**と。

昨日の台風が被害が少ないといいと本当に思いますね。このような災害が発生しそうな時には、きっと私たちには見えないけれども、不眠不休で対応している人々が多くいらっしゃるんです。気象関係、防災・行政関係、インフラ関係、交通関係の人々、他にも沢山おられると思いますけれども、私たちの「生活」を支えていて下さっています。そして、主なる神様は、それ以上です！ 私たち人間の「いのち」が滅びずに、守られるように、主はまどろむことも、眠ることもないのだ、と言うのです。これは比喩ではなく、本当にそうだと思います。主イエス・キリストが私たちに約束し、送って下さった聖霊はいつも私たちのために執り成しをしてくれているのです。

ローマの信徒への手紙 8 章で、パウロは聖霊の働きについてこう述べています。26～27 節です。——「同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成して下さるからです。人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成して下さるからです。」

そのようにして、主は、私たち以上に私たちのことをよく知っていて下さって、時に私たちをすっぽりと覆う陰、つまり逃れ場にもなって下さると言うのです。5、6 節をお読みしますと、

主はあなたを見守る方／あなたを覆う陰、あなたの右にいます方。

昼、太陽はあなたを撃つことがなく／夜、月もあなたを撃つことがない。

とあります。

「右にいます」という、「右」というのは力ある方向のようです。また**弁護者が立つ置**が、罪を犯した者の「右側」なのですね、そこで、私を訴える者を前にしても、私を守って下さる。それは、日中であっても、夜中であっても変わらない。「**昼、太陽はあなたを撃つことがなく／夜、月もあなたを撃つことがない。**」——パレスチナの砂漠の地方の日照りは厳しく、それこそ熱中症になりかねませんし、澄んだ月夜の寒さというのも、命を脅かすものがあったようです。しかし、主があなたを「覆う陰」となって下さる、**巡礼の旅を全うさせて下さる、**と言うのです。

また、もう一つの隠れた意味もあるようです。それは当時の周辺諸国において、エジプトの神は「**太陽の神**」、バビロンの神は「**月の神**」と言われていたそうです。ですので、そのエジプトの神（太陽）も、バビロンの神（月）も、あなたを打つ

ことなどないのだ、という意味もあるという学者もいます。

7、8節にはこうあります。

主がすべての災いを遠ざけて／あなたを見守り／あなたの魂を見守ってくださるよう  
に。あなたの出で立つのも帰るのも／主が見守ってくださるように。今も、そしてとこし  
えに。

神様の守りは、より深く、私たちの「魂」が本当に自由であるように、私たちを保護し  
て下さいます。これはとても大事なことではないでしょうか。私たちの心は、何か  
に、或いは、誰かに支配されていないでしょうか？本当にあなたがあなたであるため  
には、神様にだけ捉えられれば良いのだ、と聖書は言うのです。この方だけが絶対的  
なお方、あとは相対的なものや人です。永遠なるものではないのです。「永遠なる  
方」が、あなたの人生の一生を、その眼差しの中にしっかりと捉えていて下さると  
言うのですね。——「あなたの出で立つのも帰るのも／主が見守ってくださるように。」  
“「入づる」と「入る」を守り賜わん”と、文語約聖書ではなっていますが、一切の始まり  
と終わりを握っておられるのは主であって、私たちはこのお方に全幅の信頼をおい  
てお委ねする、その信仰が求められているのではないのでしょうか。

#### [結] 聖書を通し、今語りかけて下さる方を信頼する

最後に、私自身の気付きでもあるのですが、私は改めてこの詩編 121 編を読んで  
「ああ、そうか！」と思ったことがありました。それは、一人の信仰者の確信が、  
周りの人へのとりなしの祈り、愛の祈りへと広がって行くのだな、と思ったのです。

1、2節には、この詩人の＜個人的救いの経験＞がありました。「わたしは」という  
ことばで表現されています。それが3節以下では「わたし」が消え、「あなたを」、「あな  
たに」「あなたの」という祈りの言葉に展開しているのです。何故でしょうか？別の人だ  
からとする解釈もあります。そうかもしれません。けれども、私はこれを、一人の  
人の中に起こった信仰の体験として読んで許されるのではないか、と思いました。

この詩人の確信、それは「わたしの助けは来る」というものでした。わたしの助け  
は“来る”と言うのです。救いが来る。これは重要な告白です。救いとは、私が勝ち取  
ったり、出向くことで得られるのではなく、向こうから「来る」のです！ それを知ったこの詩  
人は神様を“待つ”信仰に立つことが出来ました。必ずその時は来るのだから、私は  
ただそれを信じて待つていれば良い。信仰とは、生ける神様への信頼です。そして  
それは、今の私たちからすると、“聖書を通し、語りかけて下さる”お方への信頼です。

「わたしの助けは来る。天地を造られた主のもとから。」——2節にあるこのような言葉  
を聞くと私たちは「自分はそのままで確信は持てない。そう言える人は幸せだ」と思  
ってしまうことがあるかもしれません。確かに悩みの渦中にある時、まだトンネル

の中にあるような時、とてもこのようには言えない自分がいると思います。けれども、私の尊敬する信仰の先輩はよくこう言いました。「信仰とは、御言葉を“はい、主よ。アーメン！”と受け取ることです。アタマで理解することではありません」と。御言葉とは、時に、私たちの思いをひっくり返すようにしてやってくるのです。それでもそれを、「分かりました、主よ」と受け止めて、それを握って生きてゆく。他の人には愚かに見えることでしょう。しかし、聖霊がそのことをさせて下さいます。主の言葉をそのまま受け取る時に、それは私を解き放ち、生かす力になるのですね。

それが真実であることを知った詩人は、確信を持って、他者の為に祈っています。

「どうか、主があなたを助けて／足がよろめかないようにし／まどろむことなく見守ってくださるように。」  
「主がすべての災いを遠ざけて／あなたを見守り／あなたの魂を見守ってくださるように。」  
「あなたの出で立つのも帰るのも／主が見守ってくださるように。」

神様が、「来る」ことを信じている彼は、執り成し祈る者へと新しく導かれているのです。私たちも知っているではないですか。神様が、イエス・キリストという方の姿となって、正に、私たち一人ひとりの許に“来て”下さったことを！私たちにとって神様とは、旧約聖書の時代にも遥かに優って、このイエス・キリストを通して、本当に近い、リアルなお方になって下さったのです。私たちのために人となり、十字架で血を流され、私たちがどんな過ちを犯したとしても、私たちが許し、とことん愛して下さった方を、私たちは知らされています。何と幸いなことでしょうか！

そしてこの方は、十字架で死に、しかし三日目に甦られて、「わたしは世の終わりまであなた方と共にいる」(今、この時も共にです！)と宣言下さったお方です。この主イエス様が私たちの生に同伴しておられることを知っている私たちは、エルサレムへ巡礼する必要はないのですね。ただ、いついかなる所においても見守り、私たちのまことのふるさとであり、私たちの名が記されている天の御国に帰る日まで、この方と共に、またその御声を日々聞きながら、与えられたそれぞれの人生の“巡礼”を進んで参りましょう。

「わたしの助けはどこから来るのか。

わたしの助けは来る／天地を造られた主のもとから。」!

お祈り致します。